



2020年7月2日放送

印象に残る症例②

難治性の舌痛症が漢方治療で改善した症例

益田クリニック 院長 益田 龍彦

私は元もと消化器内視鏡医でしたが現在は一般内科開業医です。毎日患者さんたちから専門外のいろいろな相談を受けます。それに何とか対応して差し上げたいという思いから毎日漢方の勉強をしている次第です。今回は歯科および耳鼻科に1年以上通院しても症状が続いていた舌痛症患者さんに、ありふれた漢方エキス剤を投与し2~3ヶ月で症状コントロール可能となった2例のお話をさせて頂きたいと思います。

1例目は66才女性。主訴は舌先端のヒリヒリ感。既往歴は52才脳梗塞。その後当院で高血圧に降圧剤、膝関節痛に防己黄耆湯エキスを処方していました。

現病歴ですが、ある年3月中旬、歯石を取った後から舌痛。初めに耳鼻科受診。カンジダと言われ通院するも改善ありませんでした。次に歯科大学受診。はっきりしたものは無いとして処置はして貰えませんでした。しかし痛みが続いているという報告を、その年の6月に私にされました。以後、来院の度に舌痛の話がされるが、耳鼻科通院中との事でそちらでの相談を勧めていました。ここで正直に言いますと、話がややこしそうなので私はその話に深入りするのを避けていたのです。しかし、翌年5月（発症14ヶ月）症状が続いているとのことで、本人が漢方治療を希望されました。

診察するに身長160cm、体重72kg、BMI:28.1。望診では色白の小太りしたほがらかな雰囲気の方です。舌は淡紅舌、微白苔、先端はわずかに紅かったです。問診票では、少し熱っぽい、汗をかきやすい、肩が凝る、腰が重い、膝関節痛、のどにつかえ、つかれ目などの

項目にチェックありました。脈はやや沈。腹力は3/5、皮膚は白く柔らかい、軽度の心下痞鞭と少腹硬満が見られました。

以上から裏虚熱証、気虚、風水、気うつ、腎陰虚証と考えました。そして汗をかきやすい、膝関節痛など既知の気虚風水（防己黄耆湯証）に加えて、少し熱っぽい、腰が重いなどから腎陰虚もあり、そのために陰虚火旺しているのではないかと考え、従来からの防己黄耆湯に加えて六味丸エキスを開始しました。

2週間後の5月28日良い感じ。続行希望。7月11日（治療開始2ヶ月後）舌の痛みはゼロになった。一旦終了。8月4日僅かに違和感。以後、六味丸の自己調節。現在1日1包で続行中。

2例目は47才女性。主訴は舌の痛み（中央～先端のヒリヒリ感）。既往症は月経困難と便秘。43才より当院で当帰芍薬散+大黃甘草湯+酸化マグネシウム服用中でした。

現病歴は、某年年明けから舌の右真ん中あたりに腫れた感じ。中央～先端にヒリヒリ感。

同年6月歯科受診、唾液分泌低下があるが処置は不要と言われました。同月、私に相談あり耳鼻科受診を勧めました。以後、毎月状況を報告して下さいました。7月耳鼻科受診し、亜鉛の低下を指摘。数ヶ月後ポラプレジンクで少し良いが不完全。同年12月、再度歯科受診し舌痛症の診断。しかし処置はなし。同月耳鼻科では亜鉛は正常になったがポラプレジンクの続行しかないと言われました。しかし痛みが続いている。という八方ふさがりの状況で私に漢方診療を希望されました（発症12ヶ月）。

診察所見は身長155cm、体重45kg、BMI：18.7。小柄で色白の綺麗な方。舌：胖大、齒痕、淡紅舌、白苔、右辺縁はやや発赤、舌下に軽度・静脈怒張。問診票では、冷え症、手足の冷え、汗をかきやすい、むくみ、疲れやすい、イライラ、動悸、みぞおちのつかえ、胃の張り痛み、つかれ眼、よく夢を見る、驚きやすい、月経は順調だが月経痛はひどいなど多項目にチェックがありました。脈はやや浮、弦。腹診：腹力中等、色白、皮膚はカサカサ、むくみ、心下痞、右に胸脇苦満。

裏虚寒証、脾気虚、肝うつ、血虚、痰飲と考えました。元もとあった血虚、痰飲の他に、肝うつが加わっていると考え加味逍遙散さらに大黃甘草湯中心の処方に切り替えました。しかしその結果は浮腫と便秘が増悪し、結局元の当帰芍薬散+大黃甘草湯に戻さざるを得ませんでした。5か月後（発症から数えると17か月後）また振り出しに戻ってしまいました。

ここから仕切り直し。心下痞、疲れやすい、むくみから脾虚痰飲と考え六君子湯エキスを開始。するとその1ヶ月後に良い感じの手応え。3ヶ月後にはスッキリ良くなり六君子湯は終了しました。その後県内の別の市に転居され今は見えていません。

2例の経過を整理しますと1例目は14ヶ月前から発症し、歯科大学・耳鼻科にて改善なかったが六味丸を開始したら2ヶ月後に痛みはゼロになった。2例目は17ヶ月前から発症

し、歯科・耳鼻科および当院初回治療で改善なし。六君子湯を開始したら3ヶ月後スッカリ良くなったという事です。

六味丸は小児直訣の処方、八味地黄丸より桂皮と附子を去った内容、腎陰虚の処方です。ここで言う陰虚は体内の潤い成分の欠乏です。効能・効果は『疲れやすく尿量減少または多尿で、時に口渴があるものの次の諸症：排尿困難、頻尿、むくみ、かゆみ』です。

また、六君子湯は万病回春の処方、内容は四君子湯＋二陳湯。効能・効果は『胃腸の弱いもので、食欲がなく、みぞおちがつかえ、疲れやすく、貧血性で手足が冷えやすいものの次の諸症：胃炎、胃アトニー、胃下垂、消化不良、食欲不振、胃痛、嘔吐』です。

という訳で、本日提示しました2例は西洋医学的診断はどちらも舌痛症ですが、全くかけ離れた処方、症状の改善を見たということであり、まさに同病異治。前回お話しした茯苓飲による異病同治とは対照的な状況と思われ、

さて舌痛症とは、口腔粘膜に器質的異常が見あたらないにもかかわらず「ヒリヒリ」「ピリピリ」「灼熱感」を訴える疾患のうち特に舌に限局したものです。中高年女性に多く、更年期、閉経後ホルモン変化、ストレス、不安、神経質などのさまざまな要因が症状発現、増悪、持続などに関与すると言われて、また、中医学では舌痛症を大きく臓腑実熱、陰虚火旺の2つに分類し、その中で臓腑実熱の場合は、臓腑の違いにより種々の病態と処方を区別しています。

本日の1例目は、六味丸で陰虚を改善することにより症状改善したと考えました。また2例目は、六君子湯で舌の浮腫を軽減することにより症状改善したのかも知れません。

しかし、これらは一応の説明にはなっているが、それだけでは不十分かもしれないと今では私は思っています。というのは、漢方エキス剤を使った報告がいくつかあり、例えば北海道の清水先生は6種類、鹿児島県の山口先生は14種類、さらに大阪の王先生はアンケート結果から15種類のエキス剤を有効とされていますが、それらが内容的にあまりに多様な方剤に亘っているからです。

私なりに整理してみると、これらのエキス剤は合計24種類にも及び、脾虚、気血両虚、気鬱、肝気鬱結、痰飲、肺、腎、心とありとあらゆる処方が実際に使用されています。もしかしら舌痛症に特効的な処方はないということかも知れません。その代わりに陰陽虚実、気血水や五臓という考え方で、患者さんの体調を整えることで結果的に舌痛症も治るとい、漢方では標準的な方法が一番手っ取り早いのかも知れないと考えました。考えてみれば舌は全身状態を反映しているのですから、これは当然かも知れません。

もうひとつ。歯科・耳鼻科では困難であった症例が、ごくありふれたエキス剤で症状改善できたということ、舌痛症には非常に難しいケースももちろん少なくないでしょう。しかし、私のケースでは簡単なエキス剤であつという間に症状改善しま

した。また 24 種類のエキス剤が舌痛症に実績ありと既に分かっています。専門科で難治性でも、漢方医なら首尾よく治療できる可能性があり、今後、漢方医は舌痛症に積極的に関わるのが良いと考えました。ラジオをお聴きの先生方も積極的にアプローチされて、その結果を私にも教えて頂きたいものだと思っています。